

## 1. はじめに

私たちは今回の発表で「シュルレアリスム」を扱います。その中で、まず前回までの発表班が扱った「ダダ」から、「シュルレアリスム」へと移行した時代背景や要因を探り、ダダからシュルレアリスムに受け継がれたものと、新しい形へと変化したものを確認します。そして、シュルレアリスムに焦点を当て、その精神や目指したもの、用いた方法などを学んだ上で、代表的なシュルレアリストの作品について、自分たちなりの視点で批評していきたいと考えています。

## 2. ダダからシュルレアリスムへ

「ダダイズムの運動により、それまでの既成の美の観念が否定され破壊された」

→既成の権威が破壊されていく中、芸術の探求領域は”無意識”の世界へ。その運動を受け継ぐように、シュルレアリスムが新しい美学の提唱(無意識の世界を提唱したフロイトの影響は大きい)

⇒シュルレアリストたちは、深層心理、無意識の世界を具現化する方法を探究

## 3. シュルレアリスム(Surrealisme)とは？

### ■ アンドレ・ブルトン「シュルレアリスム宣言」(1924.10)

#### 【目的】

理性及び道徳的・社会的偏見の課するすべての制約から解放された純粋な思考を獲得すること

#### 【シュルレアリスムの定義】

シュルレアリスム。男性名詞。心の純粋な自動現象(オートマティスム)であり、それにもとづいて口述、記述、その他あらゆる方法を用いつつ、思考の実際上の働きを表現しようとする。理性によって行使されるどんな統制もなく、美学上ないし道徳上のどんな気づかいからもはなれた思考の書きとり。

⇒合理主義を批判

### 【合理主義】

良識による経験のもとでの論理主義を指す。経験には限界があり、良識の監督を受けている。また、未知のものを既知のもの、分類可能のものにしようとする精神。

「文明という体裁、進歩という口実のもと迷信、妄想は精神から追い払われている」

### ■ 影響

- ・ 思想的にはジークムント・フロイトの精神分析
- ・ 視覚的にはジョルジュ・デ・キリコの形而上絵画作品  
⇒個人の意識より、無意識や集団の意識、夢、偶然等を重視

### ■シュルレアリスムのキーワード

- ・ 幼少期の精神(幻想、精神の処女性)
- ・ 想像力の開放(不可思議、驚異)
- ・ 狂人(の精神)を容認
- ・ シュルレアリスムを先導したのは詩人たちである

### ■ ダダとシュルレアリスムの相違

既成の秩序や常識等に対する反抗心という点において思想的に接続。しかし否定や反抗に徹し極端な自己破滅や自縄自縛的な自己否定に向かわざるを得なかったダダに対し、シュルレアリスムは精神分析的な面を取り入れることにより、ソフィスティケートされている。

## 4. シュルレアリスムにおける絵画

### ■シュルレアリスムにおける絵画の意義とは？

→無意識は創造の原理とされ、無意識の世界を表現することに芸術の最高の価値が認めら

れていた。

このような芸術創造の方法として公認されたのがオートマティスム。

## ■シュルレアリスム絵画の2つの流れ

### 1. 自動筆記やデペイズマン、コラージュなどを使う。

自意識が介入できない状況下で絵画を描くことで、無意識の世界を表現しようとした。

彼らの絵画は具象的な形態がなくさまざまな記号的イメージにあふる。

(c f / マックス・エルンスト、ジョアン・ミロ、アンドレ・マッソン etc…)

### 2. 不条理な世界、事物のありえない組み合わせなどを写實的に描いた。

夢や無意識下でしか起こりえない奇妙な世界が描かれたが、彼らの絵の中に出てくる人物や風景はあくまで具象的。

(c f / サルバドール・ダリ、ルネ・マグリット etc…)

## ■主な手法の解説とその目的

- ・ オートマティスム →主に詩などの文章構成で使われる手法。意識的思考が介入しない状況で作品をつくる方法。しかしそこには意識があったのではないか?という説もある。
- ・ フロッターージュ →木、石など、表面がでこぼこした物の上に紙を置き、鉛筆などでこすることにより、その表面のてこぼこが模様となり、紙に写し取られる方法。
- ・ デカルコマニー →ガラスなどの絵の具がすぐに定着しにくい素材の上に絵の具を塗り、そのガラスの上に別なガラスを重ねて押し付け自然と模様を作る方法。
- ・ コラージュ →絵の具以外の物を色々と組み合わせて画面に貼り付ける事により特殊効果を生み出す事が出来る方法。
- ・ デペイズマン →意外な組み合わせをおこなうことによって、受け手を驚かせ、途方にくれさせる方法。



- ・ これら方法の目的とは? →「文学と芸術の虚栄をぶちこわすため」
- ・ なぜそれが虚栄をぶち壊すものなのか?

→自動筆記が現実の意識に根ざした連想ではあっても、理性から離れたその時の意識の“偶然性”という要素を作品の要素に取り込むことが可能だからである。

## ■シュルレアリスムの写真家

・マン・レイ (エマニュエル・ラドンツキー、1890-1976年)

マン・レイは、ダダにも参加しているシュルレアリスム写真家である。1921年、ニューヨークよりパリへと移り活動の中心とすることでシュルレアリストと知り合うようになる。画家、彫刻家、ライター、家具デザイナー、金細工師、映画作家と多角的に活動をしていたがパリに移ると本格的に写真に取り組んだ。彼の写真作品は肖像やヌード、実験的なものから、さらにファッション写真と幅が広い。

彼はエロティックなものの探索をし続けた。シュルレアリスムの基礎にあったフロイト的観点からして抑圧された性の表出が合理主義からの解放、因襲による拘束からの脱出に等しいとみなされた。

マン・レイの写真に対する実験精神は多岐に渡っており、感光印画紙の上に置いたモノの輪郭を表した彼の「レイヨグラフ」は、モノを光に当ててやりさえすればよい、つまりレイヨグラフとは、ほっておけば出来る、純粹に偶然の産物である。そして変形と疎外の産物でもあり、シュルレアリストの知的世界に完璧にマッチしたものであるとされている。

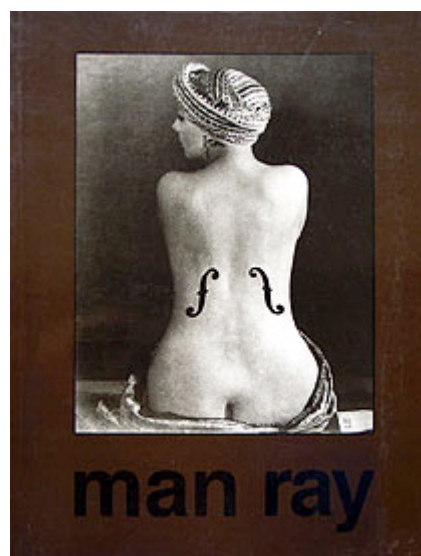
### ◎作品例

「おいしい野原」1922年

「理性への回帰」1923年

「アングルのヴァイオリン」1924年

「美の科学」1932年



「アングルのヴァイオリン」1924年

## ■シュルレアリスムの画家

・ルネ・マグリット (René Magritte, 1898–1967)

→ベルギー西部のレシーヌ生まれの、シュルレアリスムにおける 代表的な画家。

→世界が本来持っている神秘（不思議）を単純化されたフォルムで丁寧に、かつ写實的に描いた。

→同じシュルレアリスムに分けられる画家の中でも、ミロのような抽象的でオートマティスム（自動記述）を用いたタイプとも、ダリのような夢や無意識の世界を描くタイプとも異なる表現である。

→後の思想家ミシェル・フーコーや広告、グラフィックデザインなど、20世紀の文化に大きな影響を与えた。



Magritte

「光の帝国」1954

・ジョアン・ミロ (Joan Miró, 1893年 - 1983年)

→ダリと同じスペイン、カタルーニャ地方出身の画家。

→人物、鳥などを激しくデフォルメした有機的な形態、原色を基調にした激しい色使い、あふれる生命感をモチーフとしており、マグリットやダリなどの古典的、写實的な表現とは異なる表現を用いた。

→オートマティスム（自動記述）を積極的に用いた彼の表現方法はシュルレアリスムの指導者であるアンドレ・ブルトンにも高く評価され、「私たち全員のなかでもいちばん『シュルレアリスト』である」との評価を受けている。

→1930年代以降は絵画以外にも彫刻や壁画など幅広く活動し



「オランダの室内1」1928

ており、戦後のアメリカにおいては抽象表現主義の思想的源泉として評価された。

## 発表に向けて

私たちは今回の発表で、マグリットやミロの作品をはじめ代表的なシュルレアリスムの作品を具体例として取り上げ、異なる表現、手法を用いた画家の作品を比較しながら、シュルレアリスムにおける絵画とはいったい何なのか、シュルレアリスム、超現実とは何なのかについて改めて考えていきたいと考えています。また発表で私たちがあげる作品に対して、発表班以外の皆さんも、是非批判的な目でみて、積極的に批評をしてほしいと考えています。

発表班一同